

---

# ライフタイムラブ

春月桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ライフタイムラブ

### 【Zコード】

Z0160E

### 【作者名】

春月桜

### 【あらすじ】

主人公の秋白美鈴は那小崎友治が好き。でも、この思いはなかなか伝えることができない。那小崎も秋白のことが好きなのだかなぜか間に美鈴の心友の亜夏羽という子がはいつてくる。なぜかというと……。

(前書き)

や、言葉がまちがつていろといふもあるかもしれません、最後までよんじただけるといつもひれしいです。

# ライフタイムラブ

1、胸に秘めた思い。

私は中学一年生の秋白 美鈴。

私は陸上部に入部している。

私には小学校から好きな人がいる。

その人は野球部に入部している。

その人の名前は那小崎 友治。

那小崎とは小学六年生で同じクラスになった。

那小崎はどつちかつていうと人気者の面白い人クラスに一人くら  
いいるような奴。

那小崎はすつごく足が速くて短距離で優勝したこともあるほど足  
が速いのに、なぜか野球部に入部したのだ。

そのわけはきっと那小崎が小学校の少年野球チームの「アクアフ  
リームズ」に入っていたからだと私は思う。

その少年野球チームはすっごく強くて練習試合でも大会でも優勝しかしなかったというほど強いチームだつたらしい。

私と那小崎は同じクラス。

でも、那小崎には私はただのクラスメート。

那小崎は私の気持ちになんて絶対に気づいてない。

那小崎はすっごくそういうの鈍感だから。

私はこのことを心友以外には誰にも言つていなくて言つたつてみんな私の顔でわかつちゃうみたい。

私はすっごく顔にでちゃうタイプだからみんなにはお見としこなる。

でも大丈夫。

那小崎はわかつてないから。

つて何が大丈夫なんだよーーー。

私はみんなに告白しあつて言われる。

でも、私は今の関係が壊れちゃうんじゃないかつて怖くてしがないの。

一緒に笑つて、過ごすこの一番幸せなときがなくなつちゃうんじやないかつて怖いの。

心友の梅沢 亜夏羽にはむかやんとのことを言ったの。

そしたら、「自分の気持ちには正直になつたほうがいいと思つよ。」つて言つただよ。

やつぱり、告白したほうがいいのかな?でも、振られたら立ち直れそうに無いからやめておこう。

2、苦しい気持ち……。

私は今教室で亜夏羽と友だち一人と話している。

でも、ここで話していると、かすかに那小崎の声が聞こえるんだ。

そのかすかに聞こえる那小崎の声が私は好きなんだ。

これつてある意味ストーカーかな?ま、そのことは置いといて」と。

「なあ、那小崎つて好きなんとかいんの?」

私はその言葉を聞いたとき胸が急に苦しくなつた。

何がが突き刺さつたよつた感じだった。

私はそのことを聞きたくなかったから。

ガガ……。

「どうしたの？ 美鈴。 急に立ち上がりつちゃって。」

友だちの一人が私に問いかけてきた。

「私、トイレ行ってくるね。」

私はここから一刻もはやく立ち去りたくなつた。

「あ、じゃあ、私も行く。」

亜夏羽は私の腕を掴みながら言った。

「今時連れしょんかよ。」

友だちの一人がまた言った。

「ちがうよーつだ。」

亜夏羽は舌を出しながら言った。

すたすたすた……。

「そんなにいや？ 那小崎の好きな人聞くの。」

亜夏羽にはお見とうしだつたみたい。

「いやだよ。那小崎は私のことただのクラスメートとしか思つてないよ。」

私は苦しい心をおさえながら言った。

「でも、もしかしたら、那小崎の好きな人が美鈴かもしけないじゃん。」

亜夏羽はなぐさめるよつて言つた。

「絶対ない。だつて……。」

私は何かを言おうとした瞬間。

涙があふれて來た。

ポタッ…ポタッ…。

「「めん、言こ過ぎた。」

亜夏羽は私の涙を拭いながらあやまつてくれた。

亜夏羽が放つた言葉は私の耳に優しく染み込んできた。

私は首を振るだけだった。

そして、涙はがんばつてとめたけど。

田が赤くなっちゃったからぬらしたハンカチを田に優しくあてた。

すると、どんどん赤みが引いていった。

「よかつた。もう赤みはとれたよ。大丈夫？」

亜夏羽は心配しながら問いかけてきた。

「うん。もう大丈夫。ありがとう。」

私は少し笑いながらお礼を言った。

ギュウ……。

「どうしたの？亜夏羽。いきなり。」

私は何が何だかよくわからなくなつた。

「私ね、実はGJなんだ。だから美鈴のことが好きな友達じゃなくて女の子として。」

亜夏羽は私のことを抱きしめながら言った。

「それって告白？」

私はわからなかつたので聞いてしまつた。

「うん。でも、私は美鈴の大心友だから。那小崎と美鈴の恋を応援するよ。」

亜夏羽は私を抱きしめたまま言つてくれた。

「うん。ありがとう。」

私は亜夏羽に心の底からお礼を言った。

「さ、教室に戻る。」

亜夏羽は私から離れて言った。

「うんー。」

私は亜夏羽のおかげで元気を取り戻した。

すたすたすた……。

「おお、やつと帰ってきた。遅いよー。大のほうかと思っちゃった。」

友達の一人のほうが私と亜夏羽に言つてきた。

ポコンッ。

亜夏羽は軽く叩いた。

「痛い何すんのよ。」

友達の一人が怒りながら言つた。

「あんたそれでも女かよ。」

亜夏羽はあきれながら言つた。

「大じやないから安心して。」

私はさりげなくフォローした。

「わかつてゐて。ん? 何があつたの? 美鈴。さつきよりも明るくなつたじゃん。」

もう一人の友達のほうが私に言つてきた。

「ん? ちよつとだけね。」

私は笑顔でもう一人の友達に言つた。

「何があつたのよー。一人だけズルイよー。教えてー。」

もう一人の友達が言つた。

『な・い・しょ。』

私と畠夏羽は一人そろつて言つた。

3、何考へてるの?

陸上部は八時ぐらいまでやつてるの。

野球部は八時半までやつてる。

私はいつも八時半までやつてる。

だからいつも片付けるのは私。

どうして練習するかつて？私を誰だと思っているの？人一倍努力する努力人だよ。

人一倍負けず嫌いなんだ。

だから朝練習も毎日出でるし、部活時間だつていつも過ぎてる時までやつてゐる。

それに野球部の練習も見られるからね。

やつぱりストーカーなのかな？ま、いいや。

亜夏羽も陸上部なんだけど。

私は走り幅跳びで、亜夏羽は高飛びなの。

亜夏羽はそこまで背高くはないんだけど。

ジャンプ力だけは誰にも負けないぐらいすごいんだ。

だから亜夏羽は入つて早々レギュラーになつちやつたの。

すごいよね。

私の両隣の友達です。

私じゃないんだから意味ないか……。

そして、今日はもう八時。

みんなもう帰つて行く。

「じゃあ、お先にー。」

先輩はいつも手を振りながらさよならしてくれる。

だから今の先輩は優しくて大好き。

「はーい。片付けはしありますからー。」

私は先輩に手を振りながらみよならをした。

「さ、もう一息がんばり。」

タタタタタタ・ヒュッザバー……。

「よし、今日はここまでにしよう。新記録も達成できたし。」

私は片付けようとしたとき。

「よー。がんばってたねー。随分。」

那小崎がスポーツバックを肩からさげながら言った。

「何よ。もう帰り?」

私は那小崎に睨みをきかせながら言った。

「ああ。片付け手伝つてやるつか？」

那小崎は笑いながら私に言つてきた。

「おお、サンキュー。助かるよ。じゃあ、メジャー戻してきて私は  
その間に着替えちゃうから。」

私はいつもと同じように接した。

「何だよそれ。俺だけかよー。」

那小崎はちよつと怒りながら言つた。

「ありがとうねー。じゃあ、頼みますわー。」

私は無理矢理那小崎に言つた。

「じゃあ、一緒に帰れよな。」

那小崎は怒りながら言つた。

「はいはー。待つてます。」

私は嫌みみたいに言つた。

あまり変わつたことではないの。

よくあることだ。

帰りに時々会つ。

だから時々一緒に帰るの。

そして……。

「おー、サンキューね。」

私は那小崎に言った。

「つたぐ。」

那小崎はちよつと怒っていた。

「「」めんつてば。許して。」

私は舌を出しながらあやまつた。

「まあ、いいぜ。」

那小崎はあきれながら言った。

ひつして私と那小崎は中学校を出た。

「家まで送つてやるよ。」

那小崎は私に優しく言つてくれた。

「うそ、ありがとう。」

私は普通に那小崎と話していた。

「あのセ、秋田って好きな奴いる?」

ドキッ。

那小崎は私に問いかけてきた。

「何で?」

私はとりあえず聞き返した。

「え? 何で? なんでお前のことが……。」

バッ。

「きや。何? なんだ、亜夏羽かびっくりさせないでよ。心臓止まる  
かと思った。」

私の後ろから抱き着いてきたのは亜夏羽だった。

「あ、で、何? 那小崎。何か言いかけてたけど。」

私は聞き返した。

「え? あ、いや、なんでもない。」

那小崎は苦笑いしながら首を振った。

「そう。」

私はあまり気にしなかった。

「じゃあ、バイバイ。二人とも。」

私は那小崎と亜夏羽に手を振つた。

『バイバイ。』

那小崎と亜夏羽は私に手を振りながら帰つていつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

4、那小崎▽S亜夏羽。

そのころ、那小崎と亜夏羽はとこうと……。

「美鈴は渡さないよ。お前なんかに。」

亜夏羽は那小崎に言つた。

「は？ 何が。秋白がなんだよ。」

那小崎はあまり相手にしていない。

だが。

「お前美鈴のこと好きだろ。」

畠夏羽は那小崎に睨みをきかせた田で言つてめた。

「は？ 馬鹿じやん。俺が秋白のことが好き？ 笑わせるなよ。」

那小崎は笑いながら言つた。

「ふーん。じゃあ、そのこと美鈴に伝えてこよ。」

畠夏羽は那小崎に嫌みな顔をしながら言つた。  
「や、やめひよー。」

那小崎は怒りながら言つた。

「だつて好きじゃないんだろ？ それなら別にいいじゃんか。わざわざ隠さないでも。」

畠夏羽は何かたくらんでいるような顔をして言つた。

「わかった。認めてやるよ。俺が秋白が好きだつて。でも、言つんじゃねえぞー！。絶対だ。俺が自分の口から言つんだから。」

那小崎は怒りながら言つた。

「ふーん。ま、そういうなくちや楽しくないよねえ。俺はお前なんかに美鈴は渡さないよ。」

畠夏羽は那小崎に瞳眸をつむつむ田で言つてめた。

「お前、男？」

那小崎は驚きながら言った。

「ちがう女だよ。だけど男よりも女が好きな女ってわけ。馬鹿だからわかんないかもね。」

亜夏羽は嫌みつたらしく言った。

「G」ってことだろ。」

那小崎は怒りながら言った。

「ああ、そういうこと。伝えたよ。負けないって。じゃあね。」

亜夏羽は那小崎に嫌みつたらしく言いながら去っていってしまった。

スタスタスタスタ……。

「俺だつて負けねえ。」

那小崎は決心を決めたみたいだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

翌日……。

私は田覚ましがなる前に起きた。

私は那小崎が口にした言葉が気になつた。

「え? 何で? なんでお前のことが……。」「

那小崎が言いたかったことって何だろ? まさか、私のことが好き? ……。

なーんてあるわけないか。

そんなこと。

ピコリコリコリー……。

こきなり鳴り出したからびっくりした。

田覚ましを止め、私は髪の毛をくしでとかし、一つにいわき。

いつも着ている制服に着替える。

こまでは全然毎日と変わらない。

『飯を食べ。

歯を磨き。

学校に行く準備をして。

「こつてせめーす。」

そして、家を出る。

いつもと変わらない。

はずなのー。

ポンツ。

こきなり肩を叩いてきたのは那小崎。

「よつーーー。」

那小崎は私に元気よく言つてきた。

「びつくつした。今日は一体なんで來たの。」

私は驚いたまま那小崎に言つた。

「あんな。言いたいことがあつて。」

那小崎は頬を薄く赤くしながら私に言つてきた。

「何が?。」

私はちよつと警戒しながら言つた。

「あの……」

バン。

こきなり抱きついてきたのは畠夏羽だつた。

「びつつくつした？」

畠夏羽は意地悪な顔をして、私に聞いてきた。

「びつつくつしたよ。今日はまた早いねー。会うのが。」

私は今もドキドキして心臓のあるあたりをなでながら畠夏羽に言った。

「ダメ？」

畠夏羽は私がウルウルな田が苦手なことを知りながら私に田をむけてくる。

「だ、ダメじゃなじかど……。」

私は田をなじながら囁いた。

（やつぱつ）の田を舐めだ。）

「何で来たんだよ。」

那小崎は畠夏羽を睨みながら囁いた。

「いいでしょ。私たつてこの道とおつてくんだから。」

亜夏羽は小さい子みたいに舌を出しながら言った。

「くすくす。一人つて仲いいね。」

私は笑いながら言った。

『仲良くない！……』

亜夏羽と那小崎は一人で怒りながら言った。

「「」、「」めん……。」

私は小さくなりながらあやまつた。

『べーつだ。フンッ。』

二人は同時に違う方向を向いた。

「あはは……。」

私は苦笑いをした。

「そろそろ行かないと怒られちゃうから行こう？」

私は一人をあやしながら進んだ。

「うんそうだね。私の美鈴なんだから触らないでよね。」

亜夏羽は小声で言った。

「ん? 何か言つた?」

私は振り向きながら聞いた。

「ううん。何にも……。」

亜夏羽は苦笑いしながら言つた。

「そう。」

私はあまり気にせず言つた。

「うん。」

亜夏羽はうなずいた。

私は「」の日々が続いていてほしかつた。

「」の日々が変わらないでほしかつた。

・ · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

5、思いがけない告白。

キーンゴーンカーンゴーン……。

部活動の始まりのチャイム。

私は帰りの用意をしてゴーホームに着替えた。

グラウンド……。

「秋白一。」

那小崎が私のこと呼び止めてきた。

「何?」

私は那小崎に聞いた。

「今日、一緒に帰れるか?」

那小崎は照れながら私に言つてきた。

「え? い、いいけど。」

私は顔を熱くしながら言つた。

「じゃあ、部活終わつたら待つて。じゃあ、後で。」

那小崎はそつと部活に向かってしまった。

「うん。がんばって。」

私は赤い顔で応援した。

「お疲れー。先に帰るね。」

先輩はいつも様に手を振つてさよならをしてくれた。

「お疲れ様でしたー。」

私もいつも様に先輩にさよならをした。

タタタタタタ・ヒュツザバー…。

「おー、そろそろおしまいにしてよ。」

私は血圧ゲストの新記録を出したからおしまいにしてよとした。

バンッ!!

私は後ろからいきなり押された。

「ちょっとー。あんた、那小崎君に手を出しちゃうつうじゃない。」

「

一年上の先輩が私をいきなり押してきた。

「何するんですか。先輩。」

私は冷静に先輩に聞いた。

「何で冷静なわけ?」

先輩は私に怖い顔して聞いてきた。

「すみませんが帰つていただけません？」「こはまだ陸上部が使つて  
るんですけど。先輩達は何処の部活の先輩ですか？」

私は先輩達に田を光らせながら言った。

「わ、私達は美術部よ。」

先輩は私に言つてきた。

「レギュラーですよね？」

私は先輩達に田を光らせながら言つた。

「や、そうよ。」

先輩は私を怖がり始めた。

「そつなら、いいんですけど。私も一年だけど、レギュラーです。4  
メートル飛べます？」

私は怖い微笑みを見せながら言つた。

「無、無理に決まつてんじやない！…！」

先輩は後ずさつしながら言つた。

「私、飛べますけど。」

私は微笑みながら言った。

「とにかく。那小崎君に手出しありでよ……！」

先輩は私に言つてきた。

「すみません。俺がこいつを好きなんです。」

那小崎が私の前に立つて先輩達に言つた。

「な、那小崎君……が……？」

先輩は悲しそうな目をしながら言つた。

「すみませんが、帰つてくれます？」

那小崎は怖い顔をして先輩達に言つた。

「ひ、ひどい……！」

先輩は泣きながら去つていつた。

「はあー。だから女は嫌いなんだ。」

那小崎はため息をつきながらボソッと独り言を言つた。

「私のことも？」

私は那小崎を見つめながら言つた。

「……。あー！俺いつのまにかお前に告白してんじやん？！」

那小崎は以外と天然だったことを忘れていた。

「あははは、自分で言つたこと覚えてろよー。」

私は笑いながら言った。

「だつてー。」

那小崎はあきれながら言った。

「あははは、そ、帰る？？」

私は笑いながら那小崎に言った。

「ああ、そうだな。」

那小崎は私に微笑みながら言った。

・・・・・・・・・・・・

6、暗い道で不器用なキス

「私もね。実は那小崎のこと好きだつたんだ。」

私は顔を赤くしながら言った。

「やうだつたんだ。じやあ、もつと早くて言つとけばよかつたかも  
な」

那小崎は考へながらいつた。

「え？ もつと前から好きだったの？！」

私は驚きながら言った。

「え？ 知らなかつたんだ。俺六年の一学期から好きだつたんだぜ？」  
お前のこと。」

那小崎は微笑みながら言つた。

『...』...』...』...』...』...』...』

私は大声で言ってしまった。

「本当。でも、いいじゃん。」いつやって誰にも見られずにチヨツキスだつてできるんだし。」

那小崎はいきなり優しいキスをした。

100

私は思つてもいなかつたことがいきなりおきたので何が何だかわからなくなつた。

「あはは、そのまま一生わからなこままでいいよ。」

那小崎はもう一回私にキスをした。

そのキスはとても暖かくて、優しくて不器用なキスだった。

一生こんなのないんじゃないつかってぐらい長い長い時間のキスだった。

まるで時が止まつたかのよつで。

信じられない。

でも、このときが長くは続かなかつたの。

7、苦しみの契約。

翌日……。

私はいつものように学校に向かつた。

でも、ところが、バツ。

私はいきなり口をおさえられ息ができなくなり気絶してしまつた。

一体何があきたのかわからない。

私は隠しきをされ、どこかに座らせられた。

そしてロープで腕と足を縛られた。

腕と足にロープの感触がくい込むのがわかつた。

スルツ。

田隱しが外れた。

田の前には亜夏羽がいた。

「んんんーーー！」

私は口がふさがれていた。

「美鈴。 美鈴はずつと俺のもんだよな？」

亜夏羽は私の耳元でささやいた。

私は涙があふれてきた。

「怖いよな？ だつてナイフが近くにあるんだもんな？」

亜夏羽は怖い声で私に言つてきた。

「んーーー！」

私は泣きながら叫んだ。

「やうか、このガムテープとつたほうがいいよな？ とつてやれ。」

亜夏羽は野のよつな声で囁つた。

ベコッ。

「ビハシベ、ビハシヒトナリあるの？ 亜夏羽は私の心友でしょ？」

私は泣きながら必死に亜夏羽を説得した。

バツ。

「その心友とこいつ言葉を一度と俺の前でほぞくな。」

亜夏羽は怖い顔をしながら私に囁つてきた。

「……。」

私は何も言えなくなつた。

「今ここ。俺の物になると誓え。誓わないと俺の手が勝手に動きだすぜ？」

私の首にナイフの感触がある。

どんどん近づいているのがわかつた。

「10秒以内に答える。ヤダと言つてみろお前の命はねえぞ？」

亜夏羽は怖い顔をしていった。

「10。」

「やめへ。」

「9。」

「無意味。」

「8。」

「や...。」

「7。」

「やめへよーーー。」

「6。」

「無意味。心友でしょ?」

「5。」

「やめへ....。」

「4。」

「3。」

「2。」

「わかつた――――誓う誓つから。」

1

「いいだろう。許してやる。その代わり今後一切あいつとしゃべるな。」

夏羽は怖い顔をしながら私をおどしてきた。

「あいつって……。」

私は泣きながら言った。

「そう、あいつ那小崎とだよ。」

亜夏羽は私に不気味な笑みをしながら言つてきた。

「もし、あいつと一言でも話してみる。お前の命もそして、あの野球バカも命が無いと思え。さあ、そろそろ学校へいこうか？」美鈴。

亜夏羽は笑顔で言つてきた。

「卑鄙者……」

私は亜夏羽に泣きながら言った。

バシンツ。

「お前に何ができる。」

亜夏羽は私を一回叩いてから怒った。

「ひどい。」

私は泣きながら言った。

「美鈴のロープをほどいてやれ。」

亜夏羽は男勝りな声で言った。

「一緒に学校へ行こいつ？ 美鈴。」

亜夏羽は私に笑顔で手を差し伸べてきた。

「自分で立てるからいい。」

私は亜夏羽の差し伸べてきた手を無視しながら立ち上がりつて。

進んだ。

「よし。行こうか。」

亜夏羽は私の手を掴んできた。

「気安く触らないでよ。」

私は亜夏羽に怒った。

「秋白……」

那小崎が後ろから追いかけてきた。

たたたたた  
。.

私は走つて逃げた。

「あれ？ 聞こえなかつたのかな？」

那小崎は首をかしげながら言つてきた。

ՀԱՅԱՍՏԱՆԻ ՀԱՆՐԱՊԵՏՈՒԹՅՈՒՆ

私と那小崎の距離は離れていつてしまつた。

私はとても苦しくなつた。

何回も何回も振り向けない那小崎にあやまつた。

ごめんね。

ごめんね。

۲۰

何回も何回も泣きながら。

## 8、那小崎の優しさ。

ギュッ。

「やつと捕まえた。どうして逃げるんだよ。」

那小崎は後ろから私を抱きしめてきた。

「……。」

私は泣きながら黙っていた。

「どうして泣くんだよ？」

那小崎は困りながら言った。

「う……。うめ……。うめん。」

私は泣きながらあやまつた。

「あやまつてるだけじゃ、わかんねえつて……」

ギュッ。

「誰がお前をそんなに苦しめてるんだよ？」

那小崎は私のことをもつと強く抱きしめながら聞いてきた。

「畠、畠夏……羽。」

私は小声で言った。

「お前の心友って言つてる奴か?」

那小崎は聞き返してきた。

「コクン。

私は小さくうなずいた。

「そつか。大丈夫。俺がお前のことを守つてやるから。絶対に。」

那小崎は強く私のことを抱きしめてくれた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

部活帰り……。

校門に誰かがいた。

「那小崎?」

私は聞いた。

「ああ、そうだよ。」

那小崎は微笑みながら言った。

「心配したの？」となどいひで。

私は小声で那小崎に言つた。

「毎日送つてく。家まで。朝はあいつらよりもはやく迎えに行くからはやくおきとこ。インターホン鳴らすから出でくれよ。」

那小崎は微笑みながら言つた。

「うん。でも、大丈夫かな？ 亞夏羽に見つかったりしない？」

私は心配な顔をしながら那小崎に言つた。

「大丈夫。俺がお前を守る。だから。栄養補給として。お前からキスしてくんない？」

那小崎は顔を真っ赤にしながら言つてきた。

「え？ い、いいよ。」

私も顔を赤くしながら言つた。

チユウ。

「一回だけじゃたんない。」

那小崎はちよつと意地悪な顔をしながら私に言つてきた。

「もは。」

チュツ。

私は恥ずかしがりながらキスをした。

## 9、やつとの契約の解約。

翌日

ピーンポーン。

いつもより早い時間に向かう学校。

何だかちよこと怖い。

いつもおかうのは隣に那小崎かいりで、

手稿

那小崎は私の顔を覗き込みながら言ってきた。

え？ どうして？

私は那小崎に聞き返した。

「いや。俺が手を繋ぎたかつたから。」

那小崎は私に照れながら言つてきた。

「自分で言つて照れないでよ。いいよ。手繋いでも。」

私は笑顔で那小崎に言つた。

そして、私達は手を繋ぎながら登校した。

「これですむと思つなよ。」

影で亜夏羽がささやいたことは私達にはわからなかつた。

キーンゴーンカーンゴーン……。

お昼休み。

「美鈴。トイレ行かない?」

亜夏羽が私に言つてきた。

「うん。そうだね。」

私は笑顔で亜夏羽に言つた。

そして、トイレ。

バンツ。

「言つたよね?あいつと一緒にしゃべるなつて。死にたいの?」

亜夏羽は怖い顔をして言った。

「お前みたいな奴を秋白が好きになるわけないじゃんか。」

那小崎がトイレの扉のところに立って言い出した。

「お前、ここは女子トイレだぞ？！男子が入ってきたらどうなるかわかつてんのか？！？」

亜夏羽は驚きながら那小崎に言つてきた。

「心配なく。清掃中つていう看板を置いたから。大丈夫。」

那小崎は笑いながら言つた。

「ちつ。」

亜夏羽は舌打ちをした。

「俺こいつ見えても小さい頃野球だけじゃなくて柔道もやつてたんだよね。」

那小崎は柔道のかまえをしながら言つた。

「はつ！…！」

那小崎はいきなり亜夏羽のナイフを持つているまつ毛の腕を掴みながら、反対のほうに背負い投げをした。

そして、ナイフを取り上げた。

「那小崎つてある意味かつこいいよね……。」

私は苦笑いしながら言った。

「かつこいいだろ？？」

那小崎はきめポーズをとつて言った。

「亜夏羽。これにこりたらもうあんなことしない。つて約束して。それで契約を解約してくれる？」

私は優しく亜夏羽に言った。

「わかったよ。」

亜夏羽は悲しそうな顔をしながら私に言ってくれた。

私は振り向き那小崎を見つめながら笑った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「これでやつともどびつだね。那小崎。」

私は笑顔で那小崎に言った。

「そうだな。これからはもつとこいことに変えていこうな。一人で。

」

那小崎は私にそり言つて優しくキスをしてくれた。

「これからも私のことを守つてくれる?」

私は那小崎に言つた。

「ああ。ずっと守つてやるよ。」

那小崎は笑顔で言つてくれた。

一生あなたを愛し続けます。

(ライフタイム ゲーラブ カンティニュ  
ー)

(後書き)

最後まで見ていただきありがとうございました。  
できたら、感想・評価をつけていただけるととてもうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0160e/>

---

ライフタイムラブ

2010年12月25日13時50分発行